



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～ゆりの日常～

春の風 —15歳— (前編)



松岡園子

ゆりが駅で電車を待っていると、中学の時に同じクラスだった宮田さんに声をかけられた。朝7時前。この時間に駅で知っている人と出会うことは珍しい。

「ゆりちゃん、元気〜？」

「わーっ、久しぶり」

卒業してからもう2か月ほど経つ。宮田さんは、4駅向こうの公立高校に通っている。今日は所属するテニス部の試合間近ということで、いつもより早い時間から朝練があるのだそうだ。話を聞いていると、もうすぐ中間テストがあるのはゆりも同じだった。ゆりは、乗ろうと思っていた準急を見送り、宮田さんと次の普通電車に乗ることにした。

「もう、うちのお母さん、うっとうしい。帰りの時間まで決めてくるねん！」

宮田さんは、家を出る直前のお母さんとの喧嘩話を、息継ぎを忘れているかと思うほど早口で続けた。

そっかあ。うちはそういう心配はされへんなあ。

「今度のテストの点数、50点以下の教科があったら、ピアノもやめさせるって！」

習い事かあ。いいなあ。その話を聞いて、ゆりは中学を卒業して働きだしてから自分の意思でできることが増えたのかもしれないと考えた。先月の1日に入社し、昨日、初めてのお給料14万円をもらった。給与明細に『今月もお疲れ様でした』と印字されているのを見て、自分が働いたお給料が自分のもとに入ってきたのだということがより鮮明になった。うちでは宮田さんが家で交わしているような会話は無い。だけど今は自分の稼いだお金で、したいと思えばできそうなことが増えたように感じる。自分の服を買うこと、友達とのささやかな遊び、好きなものを食べること——。好きなことを好きな時に好きなだけできる、それは幸せなことだと聞いたことがあるが、ゆりも少しだけそうした気分を味わうことができそうな気がしていた。

ゆりが母・夏子と2人暮らしになったのは、小学6年生を終えた春休みだった。神戸の

家で一緒に暮らしていた祖母が亡くなり、夏子が誰もいない部屋で独りごとを話すようになった。それまで自宅で開いていた英語教室の仕事や家事はできなくなった。それどころか、まともに話をすることさえできなくなってしまった。ゆりと夏子の生活を心配した親戚は、奈良県にある家に 2 人を引き取ったが、ゆりは児童養護施設へ行くことが決まっていた。児童養護施設へ入所したゆりだったが、夏子と離れて暮らすことに納得がいかず、施設を数回抜け出した。その後の話し合いの末、ゆりと夏子は無理やり神戸の家へ帰ってきた。親戚とは意見の衝突の末、疎遠になってしまったが、夏子と暮らすということはゆりにとって何よりも譲りがたいことだった。神戸に帰ってくることができたと喜んだのもつかの間、夏子とは会話が成り立たず、言っていることも日によってコロコロ変わる。ゆりがしなければ、ご飯もきれいに洗濯された服も、掃除された部屋もなかったが、中学 3 年間でなんとか乗り切った。

ゆりが中学を卒業する頃には夏子の様子も次第に落ち着いてきていた。日々の気分には波があり、まともに会話のできる日があるかと思えば、落ち込んでいたり、混乱しているように見え、寝てばかりいる日もある。祖母の遺してくれた貯金の残高も底をつきそうで、ゆりは卒業後、中卒で給食会社へ就職し、働きながら定時制高校へ通う進路を選択した。

夏子は、作業所に通い始めてそろそろ半年が経つ。作業所ではお弁当を作り、近所のお店や事業所へ販売に行っているようだ。ゆりが高校の授業を終えて帰宅すると、作業所で覚えてきた料理を再現した夕飯のおかずがテーブルに置いてある日が以前よりも増えてきた。

「今日ね、一緒に作業している人にきついこと言われて……」

夏子は寝る前の睡眠薬を飲むととても眠くなるらしく、ゆりが帰ってくる夜 10 時頃にはたいてい寝ていることが多いのに、今日は珍しく起きていた。

「何かあったん？」

「お弁当のおかずを入れ忘れてだけで、大きな声でどなられて」

夏子の眉が、ハの字になった。

「その人の機嫌が悪かったとか？ そんなに気にせんでもええと思うけど」

「気になるのよー……」

「気にせんでいいと思うよ」

ゆりは、自分の職場を思い出した。ゆりだって、ベルトコンベアーで流れてくるおかずを入れるのが間に合わずに、飛ばしてしまうことだってある。そのたびにきつい口調で注意されることだって、これまでに何回もあった。

「その後は？ 何か言われた？」

台所の椅子に座ったままの夏子は首から上を床に向けて、背中も丸くなっている。

「ううん、その後は何も」

小さいことが気になるんだ。ゆりは、炊飯器のふたを開けた。

「明日になったら、普段通りかもしれへんよ？ もう寝たら？ お菓飲んだ？」

夏子は小さく返事をした。ゆりは部屋に戻った夏子の気配を感じながら夕飯を食べ終わり、お風呂から出た後で夏子の部屋の戸をそっと開けてみた。これまでも、気になることがあると眠れなくなることが多く、そのたびに調子を崩した。最も調子の悪い時ほどではないにしても、また前のように戻ってしまうのではないかという心配がいつも付きまとう。夏子の部屋の中をオレンジ色の豆球がぼんやりと照らしている。静かに耳を澄ましていると、小さな寝息だけが聞こえてきた。眠ることができたんや——。固く縮こまっていたゆりの頭や背中が、するするとほどけていった。

次の日の朝、職場に入るとすでにベルトコンベアーはフル稼働していた。作業場は機械音やブザー音、プラスチック製の弁当箱の重なり合う音で満ちている。人々は黙々と作業をしているが、動きを要する体の部分はいっぱい動いている。12000食のうち、今日はどれ位のところまで進んでいるだろう。蒸気や熱気が作業場いっぱいに充満し、皆、自分の目の前のことだけに集中している。しきりに2階の事務所からマイクで発注数のアナウンスが流れる。ゆりは足早にベルトコンベアーに近づき、自分の入ることのできそうな位置を探して、左右の人に目配せをした。両手を使って2種類のおかずを入れていて、大変そうなものを担当している人のおかずを1つもらう。八宝菜などのあんかけものや、汁気の多い菜っ葉のおひたしは、ゆりからすると、『大変そう』なおかずの部類に入る。うまくタイミングを合わせないと、交代する時に目の前にあるいくつかの弁当箱におかずを入れ損ねてしまう。動き続けるコンベアーの前に立ち、次々と流れてくる弁当箱に自分の担当するおかずを詰めていく。両手を規則正しく動かす。速く、確実に。

「あっ、今日は肉団子入ってる～」

入社してから食べたおかずの中でも好きな味ベスト1、2に入る肉団子が、『小おかず』の場所に入っている。それだけでお昼休みが待ち遠しくなった。プラスチック製の弁当箱は7つに仕切られている。メインのおかずは広いところ、漬物は一番狭いところという風に分けて盛り付けられ、その日の日替わり弁当が完成する。ご飯は別のラインで専用の弁当箱に機械によって詰められる。今日のおかずは、他に千切りキャベツ、オムレツ、焼き魚、肉じゃが、漬物——。キャベツは昨日、同期の小池さんが野菜場で芯を取って半分に切り、何段も積まれたカゴいっぱい到下ごしらえをしていた。千切りの機械にかけて水をくぐらせたキャベツは、カゴのなかでみずみずしく変身して出番を待っているように見える。毎日変わる献立は、2階の事務所にいる栄養士さんが考える。献立通りに調理師さんが作り、できるとすぐに真空冷却機や大型扇風機で冷やされる。冷えるとすぐにゆりたちのいるコンベアーの方へ運ばれ、弁当箱に詰められる。毎日、大量のお弁当を作り、盛り付ける。入社したての頃はベルトコンベアーの速さについていくことができなかつたゆりも、2か月ほど続けるうちに、少しずつ自分の手を速く動かすことができるようになってきているのを感じていた。

「ゆりちゃん、ちょっと」

朝の仕事がひと段落したところでゆりは責任者の片桐さんに呼ばれた。微笑んでいるように見えた片桐さんは、白い肌にピンクのチークがよく映えている。

「本社の従業員の中から1人、東灘にあるお菓子の工場に出張に行ってもらいたいんよ」

「はい……？」

用事を頼む時、いつも片桐さんは満面の笑みになる。

「今、行っている人と交代して行ってくれる人。ゆりちゃん、あんたにお願いしたいんよ」

「え……はい」

「はい」しかなかった。断る理由も思い浮かばない。

「来週からなんやけど、大丈夫か？ やり方は今、行っている人が教えてくれるから」

その後、片桐さんに説明された仕事内容は、お菓子工場の社員食堂へ訪れる社員さんに、味噌汁やうどんを提供するというものだった。そこでは、1人で調理、提供、後片付けまでをすることだった。そんなのできるかどうか、わからない。でも、やるしかない。

できるのかな。でも、片桐さんが言ってくれたことは受けない。誰よりもいちばん働き者なのに、少しも偉そうにしていない片桐さん。片桐さんのようになりたいし、そうなるにはこれが必要なことなのかもしれない。

心の中が黒になったかと思うと白に、白になったかと思うと黒に揺れる。揺れている心を持って学校へ行き、中間テストの1日目を受けたが、テストの最中でさえ気もそぞろだった。テスト期間中は家に帰る時間が少し早くなる。家に帰り着き、夏子の部屋に明かりがついているのを確認するとゆりは、カバンも置かず夏子の部屋の戸を開けた。こたつに入っていた夏子が「おかえり」と言った。今日みたいな肌寒い日もあるけれど、もうこたつも片付けないと……。ゆりは掛け布団をめくって足を入れた。

「冷た。電気入れへんの？」

「もう暖かくなってきたし、いいかなと思って」

「……ふうん。今日な、仕事で出張に行ってくれへんかって言われてん」

「へえ。どこに？」

「東灘のお菓子工場の食堂。来週から」

「そお。言ってもらったことは、何でもやってみたらいいんと違う？」

やってみたら——ゆりのぐらついていた気持ちに芯が通ったような気がした。

月曜日、ゆりはいつもより早く家を出るつもりでいた。昨日、夏子はしんどいと言って、1日中家から出ずに部屋で寝ていた。でもゆりは夏子の顔を見るだけ見て、すぐに出かける支度にかかった。まだ電気のついていない夏子の部屋の引き戸を開けてそっと覗く。戸を開けると同時に布団が動いたように見えた。

「……どう？」

返事がなければ、メモを書いて出ようと思っていた。ゆりは、調子の悪い人に「どう？」

と訊くのが好きではない。訊くことで調子の悪かった時のことを思い起こさせるし、悪いこと前提で訊ねているように感じるからだ。

「うん……しんどい」

でも、行かないわけにはいかない。

「ご飯、台所に置いてるから。食べれる？ にここ、行くよね？」

作業所に行くことができるのだろうかと思える。でも、今日はゆりだってお菓子工場に初めて行く日だ。

「……じゃあ、行ってくるね！ 今日テストやから、9時前には帰ってくるからね」

夏子の布団の中から小さなうなり声のようなものが聞こえた。それ以上の会話もなく、時計が6時半を過ぎたのを横目で見ると、ゆりは家を飛び出した。駅までの下り坂を駆ける。教科書を入れた大き目のリュックサックが背中上下に跳ねる。坂の傾斜がどんどん後ろに流れていく。自分の意志でなく、勢いをもって動く脚を感じる。駅の向こう側、町を囲うように広がる山に視点を移すと、稜線上で空が澄んだ色を映し返してくれているのが見えた。家の中に閉じ込められていた視界が、ぐんと広がるような気がした。

駅ではちょうど普通電車が到着したところだった。普段より少し早めの電車にも、こんなにたくさんの方が乗っているんだ。いつも下車する駅を通り過ぎる。今日はこの駅では降りない。片桐さんから聞いた工場までの道順が書かれたメモを開いては閉じ、電車が停車するたびに駅名を確認した。

駅に着いて工場まで歩く途中で、工事現場を通り過ぎた。阪神・淡路大震災から1年半ほど経つ。それ以後、ショベルカーやブルドーザー、大型トラックの通る音は街のあちこちで響いている。きれいに舗装された道路からは、震災での被害の大きさを思い起こさせられる。片桐さんから聞いていた通り、駅からすぐの国道を渡ったところで工場の看板が見えてきた。

正面玄関では、工場の社員さんらしき人たちが頻繁に行き来していた。ゆりの知っている人は誰もいなかった。時計を見ると8時半を過ぎたところだ。しばらくすると、女性が向こう側の道路から歩いてきた。その女性と目が合った。

「吉田さん、おはよう」

二宮さん——。土曜日にだけ本社で一緒になることがある、見覚えのある顔が目の前にあった。ゆりの両肩に押しつけられていた力が抜けていくような気がした。

「おはようございます」

「こっちから入って」

エレベーターに乗り込んだ二宮さんについて行くと、3階にある食堂に着いた。8人ほどで囲むことができるテーブルが10台、右手側には調理台のようなものが見えた。奥にはいちばん離れたところからでもよく見えそうなほど大きなテレビがある。

「ここでの仕事は、本社での仕事とは違うからね。いつも、本社でゆりちゃんが盛り付けていたお弁当が5、60食ほど九時過ぎごろに届くから。届いたご飯はここに入れて」

二宮さんは、小さな冷蔵庫のような入れものの取っ手をひいた。ゆりが中で手をかざすと、左右から温かさが伝わってきた。

「保温庫やからね。で、おかずはこの横に五段ずつ積んでいって」

そう言って、二宮さんは保温庫の横を指さした。

「朝来てまずやることは、出汁を取ることに」

白衣を着るのは本社と同じだ。その上からブルーのエプロンをつけて歩き出した二宮さんの後をついて行く。二宮さんは、調理台の左側にある棚から大きな鍋を取り出した。小学校の給食のおかずが入っていた鍋と似ている。二宮さんの手には薄茶色の巾着袋と茶色いものが入った袋が握られている。袋には、『業務用 削りぶし』と書いてある。

「これ……大きい」

ゆりは、頭からすっぽりと被ることができそうなほど大きな巾着袋を見て目を丸くした。二宮さんは、目尻にたくさん皺をつくって笑った。

「50人分の味噌汁やで？ 家のんとは違うわ」

そう言いながら、横にあったお椀で削りぶしを3杯すくって巾着袋に入れた。底の方で削りぶしが木のチップのように広がる。巾着の口を締め、さらに左右にのびる紐で袋の中ほどの位置をきつく縛った。

「水をこの辺まで入れて」

鍋の内側には、底から二宮さんの指さした7分目のところぐらいまで、うっすらとグレーの色がついている。きっと毎日、同じ量の水を入れてきたからなんだろう。ひねった蛇口から鍋に勢いよく水が落ちていく。

「このコンロは昔式やから、何回かせんと火がつかん時があるのと、つけるのにちょっとコツがあるから」

こげ茶色で重い鉄のかたまりのようなコンロだった。二宮さんがガスの元栓を開けてコンロのつまみを3回ほどひねると、青い炎がぼぼぼと円形に広がった。1人になったら自分で火をつけることができるだろうか。

「味噌汁と同時に、うどんの出汁をとってお茶も沸かすからね。コンロは1個じゃ足りひんのよ」

そう言いながら、その横のコンロにも鍋とやかんをかけた。このコンロは、ゆりの家にあるガスコンロと形もよく似ている。

「さ、そうしている間に来たなあ」

ゆりが食堂の入り口に目をやると、水色のポロシャツを着た男性が見えた。胸の名札には『配達員・中条』と書いてある。着ている水色のポロシャツは見慣れているが、本社では見たことのない人だった。顔立ちからすると50代ぐらいだろうか。

「おはようさん。おっ、今日は新人さんか？」

男性はゆりと二宮さんを交互に見ながら、手際よく黄色の番重を台車に下ろしていく。

「木曜からこの人が1人でするから、よろしゅう。私は西区の郵便局の食堂に行くことに

なったさかい」

「そおか。あんた若いな。いくつや？」

男性がゆりの方に視線を移して訊いた。

「15歳です」

「ほおー。食堂は忙しいさかいな、しっかり二宮のおばちゃんに教えてもらいや」

「慣れたら大したことないで」

二宮さんが、顔の前で左右に手を振った。

「なんか失敗してもな、二宮のおばちゃんの教えかたが悪かったんです——って言ときいや」

「ちょっと！ ええ加減なこと教えんとって」

そう言った二宮さんの目尻にまた皺ができた。

中条さんが帰ると、最上段に積まれている番重だけをよけて、ご飯とおかずの弁当箱をさっき聞いた場所に置いていった。よけた番重には、野菜が入っている。

「これは、今日の味噌汁の具。ちょうど沸騰しとうな。沸騰したら、これを放り込んで」

二宮さんは、削りぶしの入った巾着袋を鍋に入れた。袋にお湯がしみ込んでいく。湯気に乗ってふわっとカツオの香りが鼻の奥に広がる。

「今日の具は——玉ねぎと油揚げやな」

野菜が入っている番重には、細ねぎが5束、油揚げが10枚ほど、玉ねぎが3個入っていた。

二宮さんはそう言いながらまな板を取り出し、横に玉ねぎを置いた。

「皮むいて、細く切れるか？」

ゆりは黙ってうなずいた。小さいころから祖母の手伝いをしてきて良かった。玉ねぎの茶色い皮をむき、包丁でおそろおそろ切り始めた。

「大きさは大体でええよ。ゆっくり切ってる時間がないから」

二宮さんは、ゆりが玉ねぎを切っているまな板の隙間を使って、重ねた油あげを半分に切った。

「11時には最初の社員さんが食べに来るから。それまでに全部できているようにしとかなあかんから、結構忙しいんよ」

テレビの横にかけられている時計を見ると、9時半をまわっている。ゆりは自分1人で味噌汁やうどんのつゆを作っているところを思い浮かべた。1人で時間内にできるのだろうか。何かあっても近くに相談できる人がいないなんて。二宮さんがいる間に全部見て、聞いておかなくてはいけない。そう思うと、目や耳だけでなく手や足も、二宮さんの動きにピンポイントを合わせて動きだしたように感じた。二宮さんは、油揚げの『油抜き』の仕方や、うどんにのせる油揚げの甘辛い味のつけ方を次々に教えてくれた。

食堂の勝手口が開いて黄緑色の制服を着た女性が3人、食堂に入ってくるのが見えた。3人とも60代ぐらいに見える。

「おはようさん」

二宮さんが、細ねぎの先を指でつまみ取りながら3人に向かって言った。

「ああ、この人か」

最初に言葉を発した一番背の高い女性と目が合った。瞳の奥まで見据えられているような気がする。鋭い目――。

「そうそう。若い子が来てくれたやろ」

「吉田です」

「お姉ちゃん、吉田さんいうんか。私らは掃除の仕事してるさかい、たまに会うぐらいやけどよろしく。私は影山います」

目と口が笑っているのを見て、それほど怖そうな人ではないと思った。

「さ。手、止めてる時間ないでえ。巾着袋をボールにあげて、今度はうどん用の鍋に入れて。玉ねぎは、味噌汁の方に入れよか」

ゆりが玉ねぎを鍋に入れ終わりまな板を置くのと同時に、今度は細ねぎが置かれた。

「今度はこれを全部、小口切りにして」

ゆりの頭の中に、小さく切られたねぎが思い浮かんだ。亡くなった祖母がよく使っていた野菜の切り方を表す言葉は、他の場所でも通じる共通語だったんだと思った。

「輪ゴムで留めたら切りやすいで」

そう言って二宮さんは、根っこの近くと葉の真ん中あたりを輪ゴムで留めた。ひげのような根のある方から切り始める。ザクッザクッと歯切れのよい音が出る。ねぎは途中から枝分かれして、切り進めるほど広がっている。こんな太い束、切ったことないな……。二宮さんの包丁を持つ右手は、ゆりが家庭科の時に習った、人差し指を包丁の背に沿わせた持ち方ではなく、柄をグーで握る持ち方だった。ねぎは輪ゴムで留まっているからまとまっているが、切るには力が要りそうだ。

「上品に切ってる暇ないからなあ。あんたもやってみい」

ゆりも包丁を持ち、同じように切ってみた。鼻の奥につんと鋭い香りが広がった。

「力が弱いと、『新幹線』になるからなあ」

そう言って、ゆりの切ったねぎを持ち上げた。

「あ」

ゆりの切ったねぎが、5、6個連なって垂れ下がっている。二宮さんの目尻に、より一層皺ができた。



お菓子工場の食堂へ行き、調理をして後片付けをして帰ると、高校に着くのはだいたい5時になる。二宮さんがついていてくれてこの時間だから、1人になればもっと速く動かなければ間に合わないのではないだろうか。明日木曜日からは1人になる。

バスを降りて、高校までの住宅街を歩く。高校生らしき制服姿の集団とすれ違う。向こうから次々にやってくる子たちの制服姿を見ながら歩いていると、後ろから「ゆりちゃん」と呼ばれた。

「おはよ」

同じクラスのこずえが前髪をなびかせながら駆けてきた。ゆりたちの挨拶は、夕方だって夜だって「おはよう」だ。

「テストも昨日で終わったし。今日、調理実習やったっけ？ エプロン持ってきた？」

こずえが息を整えながら、ゆりのリュックサックに目をやった。

「うん、仕事で使ったエプロン使うわ。昼間も仕事で調理してきて、今日は1日中料理ばかりやあ」

2人で笑いあっているうちに、なだらかな上り坂にさしかかった。

「楽しそうやなあ」

次々と坂を下ってくる高校生を見ていると、自分とは別の空気を吸っているような気がする。学校生活はゆりたちだって楽しい。だけど、みんな仕事を終えて学校に来ている分、どこかはしゃぎきれないところがある。自分は純粋な学生とは少し違うような気がする。大人の世界に足を突っ込みながら、現実にある高校生の自分を、もて余しているようなところがある。

1時間目の授業が始まった。情報処理室のパソコンで文字入力をしていると、頭の奥に熱っぽさを感じた。

「先生、ちょっと保健室に行ってきます」

「おう。大丈夫か？ どうした？」

「なんか、熱っぽくて」

「わかった。荷物は、泉に頼んどくな」

後ろのパソコンを使っているこずえの方を見ると、2、3回うなずいてこちらを見ている。

渡り廊下を歩く。向こうの方から国語の石黒先生らしき人がこっちへ歩いてくる。

「おっ、吉田。どうしたんや？」

「熱っぽいねん」

「そうかあ。保健室、行くところかあ」

「うーん」

ゆりは遠くを見るような目で渡り廊下の向こうを見つめた。石黒先生は、長髪をひとつに束ねて眼鏡をかけている。誰に対しても今のような話し方で、ゆりは石黒先生と話していると、近所のおっちゃんみたいやと思うことが多かった。自分が敬語を使わず、それが自然に感じられることを不思議だと思った。中学生の時には、先生とは敬語で話すようにと厳しく指導されていた気がする。先生と生徒の間にはっきりとした境界線があり、それを侵すことはタブー視されていた。日々のやり取りや個人懇談の中でも、たくさんいる生徒の中のただの1人だと感じる事が多く、しんどい時でも中学校の先生には相談をした

ことがなかった。目立つような面倒を起こさなければ、ゆりの家庭の事情も取り立てて扱われるようなことはなく、ゆりの悩みも他の生徒たちが抱える進路や勉強、恋愛などの悩みの渦と一緒に混ざって回り続けているような感じだった。

ゆりは、保健室のある一階まで来ると、ドアの小窓から明かりがもれていることを確認した。保健室はたいてい明かりが点いていて、急に入っても咎められない。明かりが見えただけで胸が温まって力がほどこけていくような気がする。ドアを開けると、机に向かっていた青山先生が顔を上げた。

「先～生、しんどい～」

「吉田さん、どうしたん？」

名前を覚えてもらっていることが嬉しい。

「なんか、身体がだるいねん。仕事で疲れたんかな。熱、測りたいです」

「うん、じゃ、測ってみて」

熱はなかった。

「熱はないようやね。どうする？ 戻る？」

「もうちょっと休んでいく」

「そ。どう、仕事は？ 吉田さんは調理の仕事やったよね」

青山先生は書類を書きかけていた手を止めて、ソファーに移動した。

「今週からお菓子工場の食堂に出張で行くことになって。明日から1人で50人分の味噌汁を作ったり、うどんの調理をしたりせなあかんの」

「へえー、一人ですの」

「できるかなあ。時間に間に合うようにせなあかんし……」

「会社の人も、吉田さんならできると思ったんと違う？」

青山先生のくりっとした目はいつも笑っているように見える。

「えー、でも、量が多いわー」

ゆりは、腰かけている丸椅子を勢いよく足の先で回転させた。青山先生から何かの答えをもらいたくて話しているわけではない。明日になれば食堂に行き、教えてもらったことをやるつもりでいる。

「もうすぐチャイムが鳴るわ、集会室、行く？」

青山先生が、時計に目をやりながら立ち上がった。

「行きます。お腹すいた……」

1時間目と2時間目の間には、給食の時間がある。窓の外を見ると、さっきまで夕焼け色をしていた空が暗くなり始めていた。窓に面している体育館との間の道を、昼の学生たちが賑やかに通り過ぎた。集会室の前方にある机には、番重に入ったコッペパンとパック入りの牛乳が並べて置かれている。給食を食べるかどうかは自由だが、毎日同じメニューでもこれを食べると食べていないのでは九時前までのコンディションが違う。チャイムが鳴ると同時に保健室を出たゆりは、一番に集会室に着いた。しばらくすると、こずえ

が集会室に入ってきた。

「ゆりちゃん大丈夫？ 保健室に行ったら札が『集会室にいます』になってたから。はい、荷物」

「ありがとう。熱っぽかったけど、熱はなかったわ。お腹すいてただけかも」

「じゃあ、これから調理実習やから、いっぱい食べたら元気になるなっ」

コッペパンの甘い香りと優しい味が、口の中に広がった。

ゆりたちが帰る頃に通りかかった教室では、専科コースの大人の人達がまだ授業を受けていた。席は教室の後ろの方まで埋まっていて、全員の視線が前方のホワイトボードに集中しているのがわかる。

「みんな、何勉強してるんやろう？」

ホワイトボードには、数字がびっしりと書かれた表のようなものが見える。黒、赤、ところどころ青のマーカーで色分けされている。小柄に見える先生が、右へ左へと動き回りながら、数字を書き込んでいく。

「簿記の授業やで」

ささやくような声に振り向くと、ゆりたちの簿記の授業を担当している大平先生が立っていた。

「簿記って、私らも勉強している？」

「そうや。ここの人達が勉強してるのは、だいぶ進んだら勉強する内容やけどな」

簿記って、大人の人がこんなに真剣に勉強するものなんや。ゆりは、自分たちの授業を思い浮かべた。真剣に聞いている子がいないわけではないけれど、おしゃべりをしていたり、「わからんー」と言って机に突っ伏している子がいたり。ゆりだって居眠りをしていることがある。大人の人達が真剣に学んでいる姿ってかっこいいな。ゆりの心の中に春の風が吹き抜けたような気持ちのよさが残っていた。

(後編につづく)

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプラ